

# 夜明け

キリストの臨在の使徒



# ドーンマガジン

2026年1月号

## 目次

<b>特集記事</b> .....	<b>1</b>
誓いを新たにする .....	1
<b>聖書研究</b> .....	<b>18</b>
義へと奮い立たせる .....	18
放蕩息子のたとえ .....	22
パリサイ人と取税人 .....	26
イエスとペテロ .....	30
<b>クリスチャン生活と教理</b> .....	<b>34</b>
高潔なベレア人 .....	34

聖書を開いて一緒に読みましょう!

# 誓いを新たにする

「あなたがたは、あなたの神、主への誓いを立てたなら、それを果たすのに遅れてはならない。遅らせれば、それはあなたの罪となり、あなたの神、主は必ずそれをあなたに求めておられる。」

申命記 23:21

何世代にもわたり、新たな年の始まりは、特定の新しい目標を設定する決意と結びつけられてきました。したがって、私たちの生活を向上させるための誓いを立てることを考えるのにふさわしい時期です。2026年の新年を迎えるにあたり、主の民の多くもまた、新たな命における奉獻された歩みについて厳粛に省みる機会とするでしょう。彼らはイエスの足跡をたどる者として、より高い成長の達成を目指して献身を新たにし、焦点を定め直し、努力するでしょう。また、献身、犠牲、主に仕えるという誓いを、死に至るまでより忠実に果たすことを目指すでしょう。

カレンダーの新しいページをめくるこの時こそ、終わろうとしている一年間に天の父の慈愛に満ちた御

手から受けた豊かな善と憐れみと祝福を振り返る絶好の機会です。私たちは大きな喜びと感謝をもってこれを行います。また、キリストが長く約束された御国が、私たちが最初に信じた時よりも近づいているという証拠が増しているのを見て、な期待と希望をもって未来を見据える時でもあります（ローマ 13:11）。私たちは、愛する天の父とその民に仕えるために、時間と才能と機会を新たな方法で用いることを楽しみにしています。また、貧しく罪に病み死にゆく人類家族に命と平和の祝福をもたらし、キリストの来るべき平和の王国の統治のもとで、従順な者すべてに和解をもたらすという、神の究極の計画と素晴らしい目的に参与する準備を続けていきます。

## 誓いを立てること

「誓う」とは、あることを行うという厳粛な約束、誓約をすることです。主イエスを誠実に従う者が誓いを立てる時、それは兄弟姉妹の心の状態を反映し、天の父への完全な献身と奉仕の生涯を表します。それは私たちが持つすべて、そしてなりたいた願うすべてを捧げることを意味します。（詩篇 50:5、ペテロの手紙一 2:5）。神への誓いは、その誓いを果

たし忠実であるという、心の底からの決意をもってなされねばならない。ダビデの子ソロモンは誓いを立て、忠実に守る重大さについてこう記した。「神に誓いを立てたら、遅滞なく果たせ。神は愚かな者を喜ばれない。彼に立てた約束はすべて果たせ。約束して果たさないよりは、何も言わない方がましだ。」伝道者の書 5:4,5

## 生ける供え物

同じ志を持つ神の子供たちは皆、使徒パウロの賢明な助言に励まされています。彼はこう記しています。「ですから、兄弟たち、神の憐れみによって、自分の体を生ける供え物としてささげなさい。それは、聖なる、神に喜ばれる、あなたがたの真の礼拝です。この世と調和してはならない。むしろ、心を新たにすることによって変えられなさい。そうすれば、神の御心、すなわち、善であり、神に喜ばれ、完全な御心を、あなたがたは試みて知ることができる。」ローマ人への手紙 12:1,2

天の父に私たちの命を捧げるというパウロの励ましの言葉は、心を尽くして主に仕え、イエスの血による贖いによって義と認められた者たちだけに宛てられています（ローマ 5:8,9; ペテロ第一 1:18,19）。

彼らは、この現在の受け入れられる犠牲の時において、神によって召され選ばれた者たちです。イスラエルの昔の祭司たちが自らを神に捧げたように、イエスもまたそうされた。「あの祭司たちとは違って、イエスは毎日犠牲を捧げる必要はありません。彼らはまず自分の罪のために、次に民の罪のために犠牲を捧げました。しかしイエスは、民の罪のための犠牲としてご自身を捧げられたとき、一度で永遠にそれを成し遂げられたのです。律法は人間の弱さに縛られた大祭司を任命した。しかし律法が与えられた後、神は誓いをもって御子を任命され、御子は永遠に完全な大祭司となられた。」ヘブル人への手紙 7:27,28

使徒は神への献身的な生涯を送る特権を感謝した。彼は愛するテモテへの手紙でこう記している。「この言葉は真実です。『もし私たちが彼と共に死ぬなら、彼と共に生きるでしょう。もし苦難に耐えるなら、彼と共に支配するでしょう。もし彼を否むなら、彼も私たちを否むでしょう。もし私たちが不忠実でも、彼は忠実です。なぜなら、彼はご自身の性質を否むことはできないからです』」テモテへの第二の手紙 2:11-13

## 最優先事項

使徒ペテロは、私たちがイエスの足跡をたどる歩みについて語り、それを人生の最優先事項とすることの重要性を強調しました。「神は、その尊く、また非常に大きな約束を私たちに与えてくださいました。それは、あなたがたが、罪の欲望によってこの世にある墮落から逃れ、神の性質にあずかる者となるためです。それゆえ、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を加え、知識に自制を加え、自制に忍耐を加え、忍耐に敬虔を加え、敬虔に兄弟愛を加え、兄弟愛に愛を加えるよう、あらゆる努力を尽くしなさい。」 ペテロの手紙二 1:4-7

さらに使徒はこう付け加える。「それゆえ、兄弟たちよ、あなたがたの召命と選びとを確かなものとするために、なお一層熱心に努めなさい。そうすれば、決してつまづくことがなく、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国への入りを、豊かに与えられるであろう。」 ペテロの手紙二 1:10,11

## キリストを得る

パウロはピリピの教会への手紙の中で、自身の経験について非常に個人的な記録を残しており、それは

私たちにとって意味深い教訓となっています。彼はこう言いました。「私は、キリストのために、かつて得ていたものをすべて損失とみなしました。むしろ、私の主キリスト・イエスを知るといふ、この比類なき価値のために、私はすべてを損失とみなす。キリストのために、私はすべてのものを失ったが、それらをくず同然と見なしている。それは、キリストを得、キリストにあつて認められるためである。それは、律法から来る自分の義ではなく、キリストへの信仰によって与えられる義、すなわち信仰に基づく神の義を得るためである。それは、キリストと、その復活の力を知り、その苦しみにあずかり、その死に似た者となり、何としても死からの復活に到達するためである。」（ピリピ 3:7-11）

使徒は、キリストに愛される立場を得るために、あらゆる個人的な希望、野心、名誉を捨て去る覚悟があつたと語っている。クリスチャンも同じであるべきだ。他のあらゆる関心事や地上の利益は、永遠の価値を持たない。それらは天の希望と比べれば取るに足りないものとなり、「神の相続人、キリストと共に相続する者」として神の恵みと祝福を得ることに比べれば、取るに足りないものとなるのだ。ローマ人への手紙 8:16,17

## イエスはたとえ話で教えられた

天の父への誓いを果たす方法に関する重要な教訓は、主がタラントのたとえを語られた時に示されました。「また、天の御国は、ある人が長い旅に出かける話にととえることができる。彼は旅に出る間、自分の僕たちを呼び集め、彼らに自分の財産を預けた。ある者には銀貨五袋、別の者には二袋、最後の者には一袋を、それぞれの能力に応じて与えた。そして旅立ったのである。」（マタイ 25:14,15）ペンテコステ以来、イエスの奉献された弟子たちは、各自の能力に応じて神に対して責任と説明責任を負ってきた。これは、時間、影響力、機会を含む、彼らが持つものを神に仕えるために忠実に用いる姿勢に表れている。「喜んで与えるなら、何を与えても受け入れられる。持っているものに応じて与えよ。持っていないものに応じて与えるのではない。」（コリント人への第二の手紙 8:12）

## 五タラントと二タラント

たとえ話を続けて、イエスは言われた。「五タラントの銀を受け取ったしもべは、その金を運用し、さらに五タラントを稼いだ。二タラントの銀を受け取ったしもべも働きに出て、さらに二タラントを稼い

だ。しかし、一タラントの銀を受け取ったしもべは、地面に穴を掘って主人の金を隠した。」マタイによる福音書 25:16-18

責任ある管理者は、天の父に完全に捧げられた自らの才能を用いる方法と場所を求め、見出す。神の御言葉の摂理と導きの下で、聖別された知恵と判断力を最大限に活用する。私たちが才能を最も効果的に用いて最大の利益を得、主に栄光と誉れをもたらす方法を学ぶことは、私たちの義務である。一つの才能を持っていたしもべは、適切な判断を示さず、その才能を地上の欲望や追求の中に無造作に埋めてしまい、それによって神から受けた祝福に対する愛と感謝の欠如を示した。

するとイエスは言われた。「長い時を経て、主人が旅から帰ってきて、彼らを呼び、自分の金をどう使ったか報告させた。五たけの銀を預けられたしもべが、さらに五たけを持って進み出て言った。『ご主人様、五たけの銀を投資するように命じられましたので、さらに五たけを儲けました』。主人は大いに称賛した。『よくやった、良い忠実なしもべよ。このわずかなことに忠実であったから、今より多くの責任を任せる。さあ、主人の喜びを分かち合え!』」二タラント預けられたしもべも進み出て言った。

『ご主人様、あなたは私にニタラントを預けられました。私はそれを運用し、さらにニタラントを得ました。』主人は言った。『よくやった、良い忠実なしもべよ。このわずかなことに忠実であったから、今より多くの責任を任せる。さあ、主人の喜びを分かち合おう。』マタイによる福音書 25 章 19-23 節

たとえ話の中で、主が後に僕たちから報告を受けたと述べられている点は、イエスに従う一人ひとりが、クリスチャンとしての歩みの中で与えられた才能、能力、機会をいかに忠実に用いたかについて裁かれているという事実を示しています。使徒ペテロはこう言いました。「裁きはまず神の家から始まるべき時が来たのです。」（ペテロの手紙一 4:17）。この考えにパウロは付け加えた。「私たちは労苦し、たとえ今ここにいても、いなくても、主の御前に受け入れられるようにしている。なぜなら、私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立たなければならないからだ。そこで、各人は、自分の体の中で行ったこと、善であれ悪であれ、それに見合った報いを受けるのである。」（コリント人への手紙二 5:9,10）

## 役立たずの僕

たとえ話を続けて読むと、「すると、一タラントを受け取った者が進み出て言った。『ご主人様、あなたが厳しい方だと知っていました。植えてもいないところで刈り取り、蒔いてもいないところで集める方です。恐れて、私はあなたのタラントを地中に隠しておきました。どうぞ、あなたのものをお受け取りください』すると、ご主人は彼に答えた。『悪い、怠け者の僕よ！ 『私が種を蒔かぬ所で刈り取り、撒かぬ所で集めることを知っていたのか。ならば、私の金を銀行に預けておくべきだった。そうすれば、私が戻った時に元金に利子をつけて返してもらえたのに』」マタイによる福音書 25:24-27

一つのタラントを持っていた不忠実な僕の話は、続く節で示されるように重要な基準点となる。「そこで主人は言った。『そのタラントを彼から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。持っている者には、さらに与えられて豊かになるが、持たない者からは、持っているものまでも取り上げられるからだ。しかし、何も得ていない者からは、持っているものまでも取り上げられる。』」マタイによる福音書 25章 28-29節

このたとえを通して、イエスは、神に仕えるために与えられた機会と特権を活用しない者は、それらの

特権を奪われると教えた。それらは、自分の才能と機会を有益に用いて忠実であった他の者たちに与えられるのである。

## サタンの挑戦

私たちの主イエスは、私たちが従うべき完全な献身の究極の模範です。洗礼者ヨハネによってヨルダン川で洗礼を受けた直後、イエスはその献身を示されました。その時、天の父はサタンがイエスを肉、世界、そして敵対者によって誘惑することを許されたのです。福音書の記述にはこうあります。「それから、イエスは御霊に導かれて荒野に行き、悪魔から試みられることになった。四十日四十夜、断食を続け、ひどく飢えた。」マタイによる福音書 4章 1-2 節

サタンが最初に提案した「もしあなたが神の子なら、この石をパンに変えて飢えを満たせ」という誘惑に対し、イエスは即座に聖書の言葉で応答しました。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出るすべての言葉によって生きる』と書いてある」と宣言したのです。マタイによる福音書 4:3,4; 申命記 8:3

次にサタンは聖句を引用した。 - (詩篇 91:11,12)  
——イエスが真に神の子ならば、 (神の子は神の子である) という保証のもと、神殿の頂上から身を投げて傷つかないと示唆した。主は再び聖句に答えを求めた。それはサタンが欺瞞的に引用した言葉の真意を正しく限定するものだった。 イエスは言われた。「あなたの神、主を試してはならない。」  
マタイ 4:5-7; 申命記 6:16

サタンがイエスに対して行った三度目の誘惑は、彼を精神的に非常に高い山へと連れて行き、そこから世界のすべての王国を見渡せるようにすることだった。悪魔は、もしイエスがひれ伏して自分を拝むなら、それらをすべて与えると申し出た。しかし、主は再びこう答えられた。「『あなたの神、主を拝み、主にのみ仕えなさい』と書いてある。」マタイ 4:8-10; 申命記 6:13,14

後に使徒パウロは、サタンを「この世の神」と特定した。「この世の神であるサタンは、信じない者たちの心を盲目にしています。彼らは福音の輝かしい光を見ることができず、神の完全な姿であるキリストの栄光についてのこのメッセージを理解できないのです。」 (コリント人への第二の手紙 4:4)。ピラトの前に立たされたとき、イエスは御国を持つこ

とを認めつつも、それは「この世のものではない」と宣言された。「わたしの国は、この世の国とは違います。...わたしの国はこの世のものではありません。」(ヨハネ 18:36)。これにより、この悪しき世の支配をサタンと共有することは、イエスにとって罪であったと理解できる。このことを知っていた主は、サタンの提案に騙されなかった。

## 戦いの準備

エペソの教会への手紙の中で、パウロはこう促しています。「最後に、主にあって、その力強い力に支えられて、強くあれ。悪魔の策略に立ち向かうために、神の完全な武具を身に着けなさい。私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配者たち、権威者たち、この暗やみの世界の勢力、天にある悪の霊的な勢力に対するものだからです。」(エペソ 6:10-12) 使徒は、主の力へのより深い信仰と確信と信頼をもって兄弟たちを励ましました。これは、私たちが今生きているこの時代に特に重要です。

「それゆえ、悪の日に敵に抵抗し、戦いの後にもなお立ち続けることができるように、神の武具をすべて身に着けなさい。まず、真理の帯を締め、神の義の胸当てを着けなさい。足には、福音の平和を履

き、万全の備えをせよ。これらに加えて、信仰の盾を掲げ、悪魔の燃える矢を消せ。救いの兜を被り、神の言葉である御霊の剣を取れ。」エペソ人への手紙 6:13-17

神の武具を全身にまとわねばならないのは、私たちに飛んでくる火の矢から身を守るためである。なぜなら、私たちの戦いは、天にある闇の支配者や悪霊たちに対するものだからだ。もしサタンが、私たちが天の父の恵みと力の備えによって十分に守られ、彼に抵抗していることに気づけば、攻撃を退くでしょう。ただし、警戒を怠ってキリスト者の鎧を何らかの形で脱いでいないか、常に注意深く見張っているのです。ヤコブ 4:7; ペテロ第一 5:8,9

## この混乱した世界に向き合って

2026年の新年を迎えるにあたり、私たちは今や諸国を覆う恐怖と不確実性を認識しています。多くのいわゆる西洋諸国では、政府と国民の間に、ほぼあらゆる国内問題や世界問題に対する見解の分極化が進んでいます。これは政治的・社会的不安の増大をもたらし、場合によっては暴力や殺戮に至っています。別の面では、人工知能（AI）が世界中で指数関数的に成長しています。これに伴い、個人や社会

全体に対する破壊的な用途への懸念が広まっている。雇用情勢と労働市場の漸進的な弱体化も、多くの人々やの家族にとって重大な懸念事項だ。AIの普及が進むにつれ膨大な数の職が消滅する見通しにより、この懸念はさらに深刻化している。

国際情勢では、ロシア・ウクライナ戦争が終結に向けた合意なく継続している。イスラエルとハマスが停戦及び一部合意に達したものの、イスラエル及び中東全体の情勢は依然として、紛争・攻撃・全面戦争再燃の可能性を秘めた火薬庫状態だ。これに加え、多くの国々で反ユダヤ主義が増大している。人々や国家が、中東地域が直面する多くの問題をイスラエルのせいにする傾向が強まっているためだ。テロ組織は依然として世界各地で活動しており、多くの人々が次の攻撃がいつどこで起こるかを恐れている。2026年を迎えるにあたり、世界的な混乱の増大を示すこうした数多くの兆候は、確かにパウロの言葉「終わりの日には、危険な時が来る」を想起させる。（テモテへの手紙二 3:1）それゆえ、クリスチャンにとって、神の武具を全身にまとわねばならない必要性を一層認識し、信仰の善戦を戦う決意を保つことがいかに重要か。テモテへの手紙一 6:12

## 日々の励まし

多くの聖書研究者は「朝の決意」の朗読に親しんでいる。これは多くのクリスチャンにとって日々の助けと励ましの素晴らしい源となってきた。召命と選びを確かなものとする努力を続ける中で、この祝福の広大さに喜び続けよう。ここにこれを掲載するのは、今この時と、まさに目前に迫った新年を通して、主への誓いを新たにする私たちの責任と特権を思い出させるためである。

## 朝の決意

目覚めて最初に思うことはこうだ。「主が私に施してくださったすべての恵みに、私は何をお返ししようか。救いの杯を取り、主の御名を呼び求めよう [助けの恵みを]。いと高き方への誓いを果たそう」  
詩篇 116:12-14

神の呼びかけを心に留め、「わたしの聖徒たちをわたしのもとに集めよ。犠牲をもってわたしと契約を結んだ者たちよ」（詩篇 50:5）と記された御言葉を思い起こし、主の助けの恵みによって、今日、神の聖徒として誓いを果たし、肉とその欲望を犠牲にす

る働きを続け、贖い主と共に天の相続分を得ることを決意します。

すべての人に対して、単純で誠実であるよう努めます。

自らを喜ばせ尊ぶことではなく、主を喜ばせ尊ぶことを求める。

口をもって主を敬うことに注意し、私の言葉がすべての人にとって潤い深く祝福となるようにします。

私は主と真理と兄弟たち、そして関わるすべての人々に、大いなる事柄だけでなく、生活の些細な事柄においても忠実であるよう努めます。

神の御手と、私の最高の幸福のために全ての関心を導かれる摂理に身を委ね、ただ心の清さを求めるだけでなく、あらゆる不安、不満、落胆を退けるよう努めます。

主の摂理が許されることに対して、私は不平も不満も言わない。なぜなら、

「信仰は、何が起ころうとも、主を堅く信頼できる」からである。

## 聖書研究

1月4日のレッスン

# 義へと奮い立たせる

**鍵となる聖句：**「もし私たちが『罪がない』と言うなら、自分を欺いており、真理は私たちのうちにはありません。もし私たちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい方です。私たちの罪を赦し、すべての不義から私たちを清めてくださいます。」

ヨハネの手紙一 1:8,9

**聖句の抜粋：**

ヨハネの手紙一 1:5-10; 2:1-8

この手紙は、学者によって紀元 90 年頃に書かれたと推定されている。その頃までにキリスト教はかなりの影響力を獲得し、信者たちは異邦人の世界に広く散らされていた。キリスト教の多くの点は、当時のギリシャの哲学者たちに称賛された。しかし彼らは、キリスト教と自分たちの異教的な哲学を結びつけようとし、多くの者がいわゆる「キリスト教哲学者」となった。使徒パウロはこれについて「偽り

の知識と呼ばれるものの考えに逆らうこと」と警告した（テモテへの手紙— 6:20）。

ヨハネの手紙は、こうした哲学者たちの破壊的な教えからクリスチャンを守るために書かれた。彼は、イエスと使徒たちの教えのみを堅く守り、哲学的な教えは偽りに見なすよう勧めた。あらゆる偽教師は「多くの反キリスト者」、すなわちキリストの敵と見なされるべきであり、使徒ヨハネは彼らが「今まさに」世にいると警告している。ヨハネの手紙— 2:18

ヨハネがこの手紙を書いた目的は、彼らを義へと奮い立たせるためであった。「子らよ、あなたがたの罪は御名のために赦されているから、私はあなたがたに書く。父たちよ、あなたがたは初めからおられる方を知っているから、私はあなたがたに書く。若者たちよ、あなたがたは悪しき者を打ち勝ったから、わたしはあなたがたに書き送る。幼子たちよ、あなたがたは父を知っているから、わたしはあなたがたに書き送る。父たちよ、あなたがたは初めからおられる方を知っているから、わたしはあなたがたに書き送る。若者たちよ、あなたがたは強く、神の言葉があなたがたのうちにとどまり、あなたがたは

悪しき者を打ち勝ったから、わたしはあなたがたに書き送る。」ヨハネの手紙— 2:12-14

この手紙を書いた当時、使徒ヨハネはすでに高齢であった。経験を重ねたことで性格は非常に穏やかになり、信仰の成熟した者にも新しい者にも、非常に優しい言葉で語りかけた。彼は、彼らが罪を避け、神の愛の中に留まり、こうしてキリストにあって成熟するという重要な責任を自覚することを望んだのである。

注目すべき事実として、大多数のクリスチャンは、本来持つべき喜びと平安と祝福の満ち溢れを経験したことがない。多く的人是キリストの教理の初歩的な原則に満足し、「幼子」のままで、これらの原則を犠牲と奉仕において完全に発展させることへと進まない。（コリント人への第一の手紙 3:1）。ヨハネは、信者たちの心と精神を奮い立たせ、キリストにある特権を認識し活用するよう促した。それによって彼らがキリストにあって成長し、発展することを願ったのである。

「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、私たちの目を見たもの」——イエスの宣教の初めから——これがヨハネの証言であった（ヨハネの手紙—

1:1) 。彼と他の使徒たちは、キリストの生涯と死を目撃し、復活後の御姿も見た。彼らはこれらの真実を確信していた。使徒たちは真理の言葉を宣べ伝えるため、すべてのものを失う苦難を経験した（ピリピ人への手紙 3:8）。

キリスト教信仰の基盤となる証言は、人間のものではなく、神のものである。神がまずイエスを通して、その後使徒たちを通して語られるまで、この件に関して聞くに値する人間の証言は存在しなかった。彼らがイエスを見て知ったからこそ、私たちは彼らの確かな証言を持ち、「彼らの証言は真実である」のである。ヨハネ 21:24

## 放蕩息子のたとえ

**鍵となる聖句：**「この子は、死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったのだ。そこで、彼らは喜び始めた。」

**ルカによる福音書15章24節**

**聖句抜粋：**

**ルカによる福音書 15:11-24**

放蕩息子のたとえ話は、次のように始まります。「ある人に二人の息子がいました。弟は父に言いました。『父よ、私がまだ生きているうちに、私の相続分をください。』そこで父は財産を二人の息子に分けて与えました。数日後、弟は持ち物をまとめて遠い国へ旅立ち、そこで放蕩な生活をして財産を使い果たしました。金が尽きかけた頃、その地に大飢饉が襲い、彼は飢えに苦しむようになった。」ルカによる福音書 15章 11-14 節

このたとえ話は、大まかに言って神が全人類とどのように関わられるかを示している。父から多くのものを受け取った末の息子は、父の家を離れ、受け取

ったものをすべて「放蕩の生活」に費やして浪費した。父の家の特権を捨てた彼は、罪に陥り「過ちと罪の中に死んでいた」者たちすべてを象徴している。エペソ人への手紙 2:1; ローマ人への手紙 3:23

わがままを悟った末の息子は、後に謙虚に父のもとへ帰った。彼は言った。「父のところに帰って、『父よ、私は天とあなたに対して罪を犯しました。もはやあなたの息子と呼ばれるに値しません。どうか雇い人として受け入れてください』と。こうして彼は父のもとに帰った。まだ遠く離れていたのに、父は彼が見える。愛と憐れみに満ちて、父は走り寄り、息子を抱きしめ、口づけした。」ルカ 15:18-20

放蕩息子は過ちに気づき、父のもとに帰った。父は喜んで彼を受け入れた。父にとって、彼が家を離れている間は死んだも同然だった。しかし自ら進んで帰ってきたとき、彼は再び生き返ったのである。なんと壮大に、このたとえは神の愛の深さと広さと高さと深さを私たちに示していることか。イエスはこのたとえを語ることで、失われた人類を取り戻そうとする神の良さと配慮を、聞き手が理解することを望まれた。確かに、アダムの罪によってすべての人は失われたが、キリストを通してすべての人に命を得る機会が与えられるのである。「死が人によ

って来たように、死者の復活もまた人によって来た。アダムにおいてすべての人が死ぬように、キリストにおいてすべての人が生かされるのである。」  
I コリント 15:21,22

このたとえ話から得られる別の教訓として、父はエホバ神をよく表しており、長男は旧約聖書のイスラエルの忠実な僕たちや預言者たちを象徴し、次男は神の律法に対して主にわがままや背きに傾いていた国民の大半を表しています。イスラエル国民全体がイエスをメシアとして拒み、十字架につけたため、彼らは神に拒絶されたのです。イエスは言われた。「見よ、あなたがたの家は荒れ果てて残される。」  
マタイによる福音書 23:38

しかし、放蕩息子のように、イスラエルもまた神の完全な恵みに戻るであろう。「こうして、イスラエルのすべてが救われる。聖書にこう記されているとおり、『救い主はエルサレムから出て、イスラエルを不敬虔から立ち返らせる』と。これが、わたしが彼らと結ぶ契約である。すなわち、わたしは彼らの罪を取り除く。...神はすべての人を不従順に縛っておられる。それは、すべての者に憐れみを示そうとされたからである。ああ、神の知恵と知識の富の

深さよ。その裁きは測り知れず、その道は探り知れない。」 ローマ人への手紙 11:26-33

## パリサイ人と取税人

**鍵となる聖句：**「あなたがたに言うておく。この人は、もう一方の人よりも、義とされて家に帰った。なぜなら、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからである。」

ルカによる福音書 18:14

**聖句抜粋：**

ルカによる福音書 18:9-14

ファリサイ派はユダヤ人の中で非常に宗教的な階級と考えられていた。彼らは少なくとも外見上は敬虔で、伝統を守ることに非常に厳格であった。しかし主が語られるように、彼らの内面は集団として正しい状態からは程遠かった。「ああ、律法学者たち、パリサイ人たち、偽善者たちよ、災いだ！」イエスは彼らの心を見抜くことができたため、彼らが墓のようなものであるとさらに宣言する資格があった。外側は美しく白く塗られているが、内側は腐敗に満ちている。マタイによる福音書 23:27

今日のキリスト教世界にも同様の集団が存在する——外見上は道徳的で、非常に細かくて厳格で、細心の注意を払っているのに、主の御心に適わない者たちだ。彼らは自らの義を誇り、たとえ生まれつき他者より墮落が少なくても、誇るべきものは何もないことに気づいていない。彼らは全人類と同様、実際の完全からは程遠いのだ。「義人はひとりもない。…みな道を踏み外している」（ローマ 3:10-12）。本課のたとえ話は、神が、自らが義であると誇る道徳的に優れた者よりも、自分の状態を認め謙遜する罪深い者に対して、より深い同情と憐れみの眼差しを向けることを示すためのものである。

たとえ話はこう始まる。「二人の人が、祈ろうと神殿に上った。一人はパリサイ人で、もう一人は取税人であった。パリサイ人は立って、心の中でこう祈った。『神よ、私は他の者たち、強奪者、不正を行う者、姦淫をする者、あるいはこの取税人のようではないことを感謝します。私は週に二度断食し、持ち物の十分の一をささげています』」（ルカ 18:10-12）。この独善的なファリサイ派は、多くの点で確かに道徳的に優れた人物であった。しかし彼は非常に高慢で、自らの義の行いを誇っていた。また他人を即座に非難する傾向があり、これは心の状態が良くないことを示す明白な兆候であった。

たとえ話のもう一人の人物——取税人、すなわち徴税人——は下層階級に属し、一般に人々から軽蔑されていた。彼には多くの弱点と罪深い欠点があったが、彼は自らの状態を自覚していた。「取税人は遠く離れて立ち、天を見上げることもせず、ただ胸をたたいて言った。『神よ、罪人である私に憐れみをお与えください』」ルカ 18:13

すべてのクリスチャンは、神との関係、罪の覆い、聖霊による再生、そして心の中で進行する変革の働きによって、主に感謝するあらゆる理由を持っている。しかし、誇るべきものは何もない。使徒パウロが言うように、「あなたがたを他の人と違うものにしたのは誰か。あなたがたが持っているもので、受けたものではないものは何か。...なぜ、受けたものではないかのように誇るのか。」（コリント人への第一の手紙 4:7)

したがって、私たちと他者との違いが、私たち自身によるものではなく、主とその私たちにおける恵みの御業によるものであると認識されるなら、それが正しい心の姿勢である。この認識を持つ者は皆、この点において他者と異なることを主に向かって感謝すべきである。私たちを異なるものとするのは、神とその御子イエス・キリストによってのみである。

「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われたのです。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇る事ができないためです。私たちは、キリスト・イエスにあって、神の作品であり、キリスト・イエスにあって造られたのです。」エペソ人への手紙 2:8-10

## イエスとペテロ

キー・ヴァース：「三度目に、イエスは彼に言われた。『ヨハネの子シモンよ、あなたはわたしを愛しますか。』」

ペテロは、イエスが三度も『あなたはわたしを愛しているか』と尋ねられたので、心を痛めて言った。

『主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることもご存じです。』するとイエスは言われた。『わたしの羊を養いなさい。』」

ヨハネによる福音書21章17節

聖句抜粋：

ヨハネによる福音書 21:15-19

私たちの鍵となる聖句で、復活したイエスはペテロに三度目となる「わたしを愛しているか」と問いかけた。この問いを三度目に聞いた時、ペテロの記憶はカイアファの裁判所の場面へと遡ったに違いない。そこで彼は主を三度も否定し、ののしりまで加えたのである（マタイ 26:69-75）。ペテロは三度主に背いたが、今や主は三度、彼に主への献身を再確認

させた。そうすることで、ペテロは主の愛と恵みの中に完全に復帰したことを改めて確信するのだ。ペテロへのこの三度の問いかけは、彼の主への背きを振り返る唯一の記録であり、それ以上の責めを免れるものとなった。

主はペテロに「あなたはわたしを愛しているか」とただ尋ねられた。三度の否認を責めることなく、ただペテロの愛と献身の深さを確かめたかったのだ。おそらく私たちは、まずペテロに謝罪させるべきだと感じたかもしれない。他者を戒める際には、直接的な非難ではなくほのめかしを、過去の過ちではなく現在の心の状態を問うことで、極めて優しく行うというこの教訓をよく学ぼう。イエスがペテロに投げかけた問いは、キリストの御業よりも漁業を優先する彼の傾向を正すという重要な目的も果たしていた。

主が最初の二つの問いかけでペテロに「わたしを愛しているか」と尋ねた時、用いられたギリシャ語「アガパオ」は、状況や報いを問わず、無私で犠牲的、完全に献身的な、愛の最高形態を意味します。しかし三度目の問いかけでは、ギリシャ語の「フィレオ」が使われている。これは家族愛、兄弟愛、友情を意味する。ペテロはこれに心を痛めた。彼は主

を兄弟愛と親愛の情で愛していることは自覚していたが、最高の愛「アガパオ」にはまだ達していないと悟ったのである。

ペテロの人物像で最も称賛すべき特質の一つは、その忍耐強さであった。過ちを犯しても、指摘されれば即座に方向転換した。主との間に悔い改めが完全に消し去れなかった曇りが残っていることに、彼は深い後悔を感じていた。イエスはペテロの心の状態が純粹であることを知っていた。過去の過ちを責め立てる代わりに、彼に成し遂げてほしい使命を伝えたのである。「子羊を養いなさい」「羊を養いなさい」と命じることで、イエスは漁ではなく羊の群れを世話することがペテロの新たな使命であることを強調された（ヨハネ 21:15-17）。主は以前ペテロを「人の漁師」として召されたことを思い出させられた。彼の心がなお忠実で熱意に満ちていることを知って、イエスはその使命を新たにされたのだ。

マタイ 4:19

もしペテロが漁業を続け、主の羊を顧みなかったなら、その行動は彼の返答と矛盾していたでしょう。それは言葉では愛を示しても、行いと真実においては愛ではなかったのです。私たちもこの経験から教訓を学ぶべきである。イエスの言葉に調和して、

世俗的な目的や野心を捨て去り、ペテロがそうしたように、靈的に生まれた羊、すなわちキリストにある兄弟たちの必要に応える奉仕に心から従事しよう。  
1 ペテロ 4:10,11

## 高潔なベレア人

「さて、ベレアのユダヤ人たちは、テサロニケの人たちよりも気高かった。彼らは熱心に御言葉を聞き入れ、毎日聖書を調べて、パウロの言うことが真実かどうか確かめた。その結果、多くの人が信じた。また、高貴なギリシャ人女性たちや、多くのギリシャ人男性たちも信じた。」  
使徒言行録 17:11,12

新たな年を迎えるにあたり、真理を求める聖書の学び手すべてが、神の御言葉を熱心に学ぶことの重要性を改めて思い起こすのにふさわしい時である。聖書は史上最高の書物として広く認められている。その起源は、地球の驚くべき創造の始まり、すなわち神の地上創造物にとっての住まいとしての究極の準備にまで遡る。そのページの中には、人類にとっての重要性と意義を示す圧倒的な証拠が記されている。何世紀にもわたり、無数の人々によって、宇宙の偉大な神である慈愛に満ちた天の父の神靈感を受けた言葉として受け入れられてきた。

聖書の教えと正しい原理は、他のあらゆる書物とは一線を画しており、現代の世界においても真理のな基準であり続けています。その主要なテーマである贖い、そして罪と死の荒廃から人類が最終的に回復されるという物語は、長い年月をかけて多くの著者によって書かれた様々な書物の中に発見されます。これは聖書の神靈感による調和と目的を強調する役割を果たしています。こうして私たちの注意は、真理の様々な原則に向けられる。そこでは、靈感を受けた各著者が、異なる時代と場所で書かれた他の著者たちの記述と調和している。

神の聖なる言葉は文明の松明そのものと称されてきた。その道徳的・倫理的教えは、人類の心を高貴な生活へと導く上で、他のいかなる書物よりも大きな影響を与えてきた。それは尽きることのない励ましと慰めの源である。多くの人々が悲しみの時に聖書に慰めを見出し、他の人々は人生の不確かな場面に立ち向かう力を得てきた。また、その数多くの教訓に確信を求める者もいる。

特に聖書はキリスト教の教科書である。それは天の父が人類という家族を創造し、救うという驚くべき計画と目的を明らかにしている。このメッセージは、将来、キリストの栄光の王国が全地の上に力と

権威をもって統治する時、壮大かつ究極的な結末を迎えるべく進行中です。聖書によれば、これは「世々の計画」によるものであり、神が「油注がれた者、私たちの主イエス」のために「定められた」ものです。エペソ人への手紙 3 章 11 節

聖書の素晴らしい著者とその永遠の御計画について、詩篇の作者ダビデはこう記した。「天は神の栄光を語り、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼も夜も、絶え間なく語り続け、夜も夜も、知恵を明らかにする。声もなく、言葉もなく、聞こえる音もない。しかし、その声は全地に響き渡り、その言葉は地の果てにまで届く。神は天に太陽の幕屋を設けられた。それは花婿が寝室から出るがごとく、勇士が駆け回ることを喜ぶがごとく。天の一方から昇り、天の果てまで巡り行き、その暖かさを欠くものはない。主の律法は完全で、魂を生き返らせる。主の戒めは真実で、愚かな者を賢くする。主の戒めは正しく、心に喜びを与える。主の命令は明かりのように輝き、目に光を与える。主を畏れることは清く、永遠に続く。主の定めは確かで、すべてが正しい。それらは金よりも、多くの純金よりも尊く、蜜よりも、蜂の巣の蜜よりも甘い。」詩篇 19:1-10

## 信仰のための奉仕

初期の教会が確立される過程で、使徒パウロとその同行者たちは、キリスト教に改宗した者たちに真理を宣教するため広範囲に渡って旅をした。彼らは、キリストにあるこれらの新しい兄弟たちが、学び、奉仕、交わりのための集会を組織するのを助けた。神の偉大な知恵と摂理により、歴史家であり使徒行伝の著者であるルカは、これらの重要な出来事の多くを記録している。使徒行伝 1:1,2; ルカによる福音書 1:1-4

パウロらが宣べ伝えた真理の知識は、罪に病み死にかけている人類家族に対する天の父の究極の救いと和解の計画と目的を告げ知らせた。（エペソ 1:13; コロサイ 1:20; テトス 2:11）真理の聖霊はまた、キリストの忠実な小さな群れが天の召命を目指して奮闘し、キリストの花嫁の一部としての地位を得る道を開いた。ゆえに私たちは確信する。「恐れるな、小さな群れよ。あなたがたの父は、あなたがたに王国を与えることを喜ばれるからだ。」ルカ 12:32

忠実な者たちは、栄光に輝く主と共に天の王国を分かち合い、地上のすべての家族に祝福を及ぼす特権を与えられます（創世記 22:16-18）。この栄光に満ちた計画はまた、墓の中にいるすべての者、すなわちキリストのな支配のもとでまだ到来していない

王国の確立を無知のうちに待ち望む者たちの復活をも定めています。ヨハネ 5:28,29; 使徒行伝 24:15; 1コリント人への手紙 15:25,26

## 道中の葛藤

使徒たちが喜びの福音を伝えるために広範囲に渡って旅をする中で、多くの新しいクリスチャン信者が群れに加えられ、真理への理解と主の民との交わりを得るようになりました。しかし、偏見と対立はしばしば生じ、パウロとその同行者たちがどこへ行っても付きまとったのです。ユダヤの律法の教えを強く守る者たちと、キリスト・イエスの新しい教えを説く者たちとの間に摩擦が生じていた。これらの教えは、多くの場合、人々が初めて耳にするものだった。

今回の聖句の直前に、パウロとシラスはテサロニケからベレアへの旅のため、夜陰に乗じて脱出していた（使徒 17:10）。到着後、彼らは地元の会堂で受けた歓迎に祝福された。兄弟たちの神の言葉への熱心な関心と霊的成長に深く感銘を受け、これが彼らをテサロニケの会衆よりも「より高貴な」存在として際立たせていると記している。

## 称賛に値する特質

この文脈における「高潔」という言葉は、ベレアのキリストの兄弟たちが聖書を調べた際に示した、心と人格の称賛に値する性質を指している。明らかに、彼らは真理の教義と教えを自らのものとすることを望んでいたのである。この聖句のより適切な解釈は、高潔な心の考えを広げており、他の聖書翻訳でもそのように訳されている。比較のために読むと、「さて、これらの人々はテサロニケの人々よりも高潔な心を持っていた。彼らは熱心に御言葉を受け入れ、毎日聖書を調べて、これらのことがそうであるかどうかを確認した。そのため、彼らの多くが、多くの著名なギリシャ人男女と共に信じたのである。」（使徒言行録 17:11,12）。このように強調されているのは、これらの兄弟たちが聖書を日々調べただけでなく、「熱心に」注意深く検証し確かめようとした願望である。

## パウロとペテロの証言

パウロはテサロニケの教会の兄弟たちにこう戒めた。「すべてのことを見分けなさい。良いものはしっかりと保ちなさい。」（テサロニケ人への第一の手紙 5:21）。愛する兄弟テモテへの手紙で、使徒は彼を

励ました。「神に認められる者となるために、真理の言葉を正しく分け与える者として、恥じることのない働き人となるために、努力しなさい。」（テモテへの第二の手紙 2:15）。後に彼はこう戒めた。

「あなたがたが学んだこと、また確信したことに従って歩みなさい。あなたがたを教えた者が誰であるかを知り、また幼い頃から聖書を知っていることを知っています。この聖書は、キリスト・イエスにある信仰を通して、救いへの知恵を与える力があるのです。すべての聖書は、神の靈感によって書かれたもので、教え、戒め、矯正、義の訓練のために有益です。こうして、神の人が、あらゆる良い働きのために十分に整えられ、完全に備えられるのです。」（テモテへの第二の手紙 3:14-17）

使徒ペテロも第一の手紙で同様に勧めている。「それぞれが賜物を受けたように、神のさまざまな恵みの良い管理人として、互いに仕えなさい。語る者は神の言葉を語り、仕える者は神が与える力をもって仕えなさい。こうして、すべてのことで、イエス・キリストを通して神が栄光を受けられるように。栄光と力は、世々限りなく神のものだからです。アーメン。」（ペテロの手紙一 4:10-11）

使徒パウロ、ペテロらによる戒めと励ましは、適切な心の状態で受け入れられるとき、ペンテコステ以来、主の足跡をたどるすべての者にキリストに似た霊性を育む助けとなってきました。これには真理の適切な管理者となることも含まれ、すべてのクリスチャンが模範とすべき重要な教訓です。これは特に、この「今の悪しき世」の終わりの時代に生きる者たちにとって真実です。ガラテヤ人への手紙 1:4

## これらのことを思い起こして

約二千年前、ペテロが記した素晴らしい言葉は、今もキリストに従う私たちへの祝福です。彼は宣言しました。「これらのことを、あなたがたがすでに知っていて、教えられた真理にしっかりと立っているにもかかわらず、私はいつも思い出させます。私が生きている限り、あなたがたに思い出させ続けるのは当然のことです。私たちの主イエス・キリストが、私が間もなくこの世の生活から去らなければならないことを示されたからです。ですから、私が去った後も、あなたがたがこれらのことを常に覚えていられるように、私は努めて働きます。」（ペテロの手紙二 1:12-15）

使徒は、主イエスが地上での宣教中に示された真理の言葉を絶えず語り続けた。「私たちが主イエス・キリストの力と来臨（ギリシャ語：臨在）をあなたがたに伝えたとき、巧みに作り上げた作り話に従ったのではない。私たちはその栄光の目撃者であった。神である父から栄光と誉れを受けたとき、天の栄光の中から『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が聞こえたのである。わたしたちは聖なる山で彼と共にいたとき、この天からの声を聞いたのである。」（ペテロの手紙二 1:16-18）

ペテロはさらに、私たちが真理を神の力と影響力である聖霊によって受けることを強調した。「預言者たちが宣べ伝えたメッセージには、なおさら確かな信頼を置くべきです。彼らが記したことに細心の注意を払わなければなりません。彼らの言葉は、夜明けが来て、キリストという明けの明星があなたがたの心に輝くまでの間、暗闇の中で輝く灯のようなものだからです。何よりも、聖書の預言は、預言者自身の考えや人間の意志から出たものではないことを悟らなければならない。いや、預言者たちは聖霊に動かされ、神から語られたのである。」ペテロの手紙二 1:19-21

ペテロは第一の手紙で、自分の言葉が神に生涯を捧げた者たちに向けられたものであることを明らかにした。「あなたがたの信仰の試練は、火で試される朽ちる金よりもはるかに尊いものであり、イエス・キリストが現れる[啓示される]ときに、称賛と栄光と誉れとなるためです。あなたがたは、まだ見たことのない方を愛し、今、目に見えないが、信じて、言葉に尽くせない、栄光に満ちた喜びをもって喜んでいる。信仰の結実、すなわち、あなたがたの魂の救いを受け取るのである。」 ペテロの手紙一 1:7-9

この真理の言葉は、他の誰にも啓示されていなかった。昔の預言者たちにも、天使たちにも。彼は説明した。「この救いについて、預言者たちは熱心に探求し、調べた。彼らは、あなたがたに臨むべき恵みについて預言した者たちである。キリストの霊が彼らの中であって、キリストの苦しみとそれに続く栄光をあらかじめ証ししたとき、それが何を、あるいはどのような時を意味するのかを探ったのである。彼らには、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕する使命が与えられていたことが啓示された。今、天から遣わされた聖霊によって福音を宣べ伝える者たちが、あなたがたに伝えているこれらの事柄は、天使たちでさえも注視したいと願っている。それゆえ、あなたがたの心の腰を締め、慎み深

く、イエス・キリストの現れと共にあなたがたにもたらされる恵みを、終わりまで望み続けなさい。」  
ペテロの手紙一 1:10-13

## 天からの知恵

ヤコブの手紙は新約聖書の中で最も初期に書かれたものとされている。これは、主イエスの地上での働きが終わった直後にキリスト教に改宗したユダヤ人たちに最初に与えられた教えを表している。ヤコブは強調する。「すべての良い賜物、すべての完全な賜物は上から来る。光たちの父から下ってくる。彼には変わりもなければ、移り変わる影もない。」ヤコブの手紙 1:17

天の父はすべての真理の源であり、聖霊によって民に理解を与えられる。「御自身の意志によって、真理の御言葉（ ）をもって私たちを生んでくださったのは、御自身の創造物の初穂となるためである。だから、愛する兄弟たちよ、だれでも聞くことに速く、語ることに遅く、怒ることに遅くあれ。」ヤコブ 1:18,19

神の民に対する驚くべき備えについて、ヤコブはまた神の知恵が常に清く聖なるものであることの重要

性を指摘した。「上から来る知恵は、まず清く、次に平和を愛し、柔和で、従順であり、慈愛に満ち、良い実を結ぶ。偏見がなく、偽りがない。平和を築く者たちのうちに、義の実が平和のうちに蒔かれるのである。」ヤコブの手紙 3:17,18

前述の聖句は、天の知恵が神の御性質と調和して働く事実 私たちの注意を向けさせる。上から来る知恵の霊は平和を愛するが、使徒はその重要性を純粹さより先に置かなかった。真の知恵は、聖さと純粹さに一致する時のみ平和を愛する。それは聖なるものとのみ和解できる。柔和さは純粹さに続き、真理によって聖別された時に平和を愛する。天の知恵は「あわれみに満ちている」ことを喜びとし、上から来る知恵に照らされた人々の心には「良い実」が育まれる。

## 真理の光

預言者イザヤは光と、それが命と真理と持つ関係について語る。神の御心を示す中で、彼はこう記す。「わたしは盲人を、彼らが知らなかった道に導き、彼らが歩んだことのない小道に歩ませる。彼らの前に暗闇を光とし、曲がりくねった道をまっすぐにしよう。わたしは彼らにこれらのことを行い、決して

見捨てない。」 「シオンのために、わたしは黙して  
いられない。エルサレムのために、わたしは休む  
ことができない。その正義が輝きとして現れ、その  
救いが燃える灯火となるまで。」 イザヤ書 42:16;  
62:1

他の多くの聖句も、光という特別な賜物に私たちの  
注意を向けさせます。「命の泉はあなたのもとにあ  
る。あなたの光の中で、私たちは光を見る。」 「喜  
びの声を聞く民は幸いである。主よ、彼らはあなた  
の御顔の光の中を歩む。」 「あなたの言葉は、わ  
たしの足のともしび、わたしの道の光です。」 「正  
しい者の道は、ますます輝きを増す光のように、完  
全な日へと照らし出される。」 (詩篇 36:9、89:15、  
119:105 / 箴言 4:18)

キリストの従者たちのための指針と霊的視点として、  
私たちはこう読む。「だれもともしたあかりを隠し  
たり、かごの下に置いたりしない。むしろ、ともし  
たあかりは燭台の上に置く。そうすれば、家に入る  
者すべてがその光を見ることが出来る。」 あなたの  
目は、体に光を与える灯のようなものです。目が  
健全であれば、全身が光に満たされます。しかし、  
目が健全でなければ、全身が闇に包まれます。自分  
が持っていると思っている光が、実は闇ではないか

注意しなさい。もしあなたが光に満たされ、暗い隅が一つもないなら、あなたの人生全体が輝きに満ち、まるで投光器があなたを光で満たしているかのように輝くでしょう。」ルカによる福音書 11:33-36

## 神の御言葉を黙想する

黙想は、愛する天の父の道に歩み、御言葉に留まろうとするクリスチャンの特質である。イエスが生まれる何世紀も前、詩篇の作者はこう記した。「あなたの戒めは私の喜びです。あなたの証しは永遠に正しい。私に悟りを与え、生かしてください。私は心を尽くして叫びました。主よ、お答えください。私はあなたの定めを守ります。あなたに叫びました。私を救ってください。そうすれば、私はあなたの証しを守ります。私は夜明け前に起き、助けを叫び求めます。あなたの言葉を待ち望みます。私の目は夜番を待ち望み、あなたの言葉を黙想するためです。」

(詩篇 119:143-148)

詩人はさらにこう言いました。「不敬虔な者の助言に従わず、罪人の道に立たず、嘲る者の座に着かない人は幸いである。主の律法を喜びとし、昼も夜もその律法を黙想する。彼は水辺に植えられた木の

ように、時が来れば実を結び、その葉も枯れない。彼がすることはすべて栄える。」（詩篇 1:1-3）

使徒パウロはヘブル人への手紙でこう記している。「神の言葉は生きていて力があり、両刃の剣よりも鋭く、魂と霊、関節と骨髄の分け目まで刺し貫き、心の思いと意図を裁くことができる。神の御目から隠れる被造物はなく、私たちが関わる方のご覧になる前に、すべてのものはむき出しにされ、明らかにされている。」それゆえ、天を通られた大祭司、神の御子イエスを私たちに与えられたのだから、信仰の告白をしっかりと保とう。」ヘブル人への手紙 4:12-14

## イエスの証し

イエスは、ご自身の意志ではなく天の父の意志と目的を成し遂げるために遣わされたことを明らかにされた。その謙遜な言葉はヨハネの福音書に記されており、こう読まれる。「わたしには、自分から何一つできることはない。私が裁くのは、神が私に命じられるとおりに裁くのです。それゆえ、私の裁きは正しいのです。なぜなら、私は自分の意志ではなく、私を遣わした方の意志を行うからです。もし私が自分自身のために証言するなら、私の証言は真実

ではありません。しかし、私について証言する別の人もいます。そして、その人が私について語ることはすべて真実であると、私は保証します。」ヨハネ 5:30-32

イエスが「また、私について証言する方がおられる」と言われたとき、それは洗礼者ヨハネを指していました。彼はキリストの先駆者であり、その御業の道を整えたのです。「実際、あなたがたは調査者を遣わして洗礼者ヨハネの言葉を聞かせたが、彼が私について語った証言は真実であった。もちろん、私は人間の証人を必要としません。しかし、あなたがたが救われるために、これらのことを言っているのです。ヨハネは燃え、輝く灯のような人でした。あなたがたは一時、彼のメッセージに熱狂しました。しかし、私にはヨハネよりも偉大な証人があります。私の教えと、私のなした奇跡です。父は私にこれらの業を成し遂げるために与えられました。それらは、父が私を遣わされた証拠です。そして、私を遣わされた父ご自身が、私について証言しておられます。...あなたがたは聖書を熱心に研究している。その中に永遠の命があると思っているからだ。まさにこの聖書こそが、わたしについて証言しているのだ。」ヨハネ 5:33-37,39

## ベレアの人々の遺産

使徒パウロがベレアの教会会員たちを「高潔な心で聖書を学ぶ者たち」と評したことは、主の民すべてが心に留めておくべき肯定的な教訓である。これらの兄弟たちは神の誤りなき御言葉を心から信じ、理解のための唯一の真の源であることを強調した。彼らは、自らの信仰の最終的な根拠となる「主はこう言われる」という御言葉の価値と意味を深く理解していた。

冒頭の聖句を別の訳で再び引用すると、ベレアの兄弟たちの遺産についてこう記されている。「さて、このユダヤ人たちはテサロニケの者たちよりも良識があり、気高かった。彼らは心を開いて、キリストを通して神の御国における永遠の救いを得るという知らせを喜んで受け入れ、熱心に調べ、毎日聖書を調べて、これらのことがそうであるかどうか確かめたのである。こうして、多くのユダヤ人と、かなりの数の著名なギリシャ人、男女を問わず、信者となった。」使徒言行録 17:11,12